

テレビインタビュー番組におけるあいづち的表現

ポライトネスの観点から

大 塚 容 子

Back-channeling Expressions used in TV Interview Programs In Terms of Politeness Theory

Yoko Otsuka

Abstract

The objective of this paper is to find the answers to the following questions: 1) what kind of back-channeling expressions are used in TV interview programs, 2) whether or not back-channeling expressions are varied according to the relationship between the speaker and the hearer, and 3) what triggers the difference, if they are.

The three kinds of TV interview programs were transcribed, and the back-channeling expressions used in the programs were classified into five groups. As a result, the back-channeling expressions were differently used among the three kinds of programs. The differences were analyzed in terms of Brown and Levinson (1987)'s Politeness Theory, and we suggest that the relationship between the speaker and the hearer, in other words, the difference in age between them triggers the variation of the back-channeling expressions.

Key words

back-channel, politeness, common ground, difference in age

はじめに

日本人はあいづちをよく打つと言われている。そのためか、日本語母語話者が英語で会話をすると、英語母語話者より頻繁にあいづちを打つという報告(久保田(2001))がある。また、メイナード(1993)は、日本語会話と英語会話におけるあいづちの頻度を調査し、日本語会話では英語会話の約2倍のあいづちが使用されると述べている。

このような日本語母語話者が多用するあいづちは近年、さまざまな観点から研究されている。陳(2002)は、国語学の立場からの研究、談話分析の手法を取り入れた研究に大別し、あいづち研究を概観している。そして、従来の研究の多くは、あいづちの頻度に焦点を当てたものが多いことを踏まえたうえで、あいづちの質的研究の必要性を説いている。

日本語会話におけるあいづちは、無秩序に打たれているわけではない。話し手が要求する適切な場所で聞き手があいづちを打てば、話し手は心地よく会話を継続することができる。話し手は、期待しているところであいづちが打たれなかったり、逆に期待しないところで打たれたりすると、会話を継続していいのかどうか不安に感じる。そして、それは話し手の聞き手への不信感につな

がる。聞き手が話し手にとって心地よくあいづちを打てば、話し手は聞き手が自分、あるいは自分の発話に対して興味を示していると感じ、よりよい人間関係の構築の一助になる。逆に、不適切なあいづちは、話し手に不安や聞き手への不信感を与え、結果的に良好な人間関係の構築が困難になる。このような極めて特徴的なあいづちをもつ日本語の会話展開を、水谷（1983）は欧米の対話型の会話展開に対し、「共話」と呼んでいる。

本稿では、日本語会話で重要な役割を果たすあいづち的表現をポライトネスの観点から分析する。具体的には、話し手と聞き手との間の年齢差によって、ある特定の個人のあいづち的表現がどのように変化するかを考察する。まず、あいづち、あいづち的表現の定義をし、次にあいづち的表現とターンの関係を概説する。次に、3種類のテレビインタビュー番組におけるあいづち的表現の使用実態を示し、ポライトネスの観点から考察する。うなずき、笑い等はあいづちと密接な関係があるが、このような非言語表現は本稿では扱わない。また、本稿で提示する例文は、主に調査で使用した資料からのものである¹⁾。

1. あいづち

日本語のあいづちの定義及び機能に関する研究は水谷（1988）杉戸（1989）、メイナード（1993）、村田（2000）等があるが、ここでは会話における聞き手の役割という観点からあいづちに関わる現象を広く捉えた堀口（1997）を分析の基本とする。

堀口（1997：42）は、あいづちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義している。

上記の定義に基づき、次のような五つの機能を提示している。

(1) 堀口（1997）によるあいづちの機能分類

- 聞いているという信号
- 理解しているという信号
- 同意の信号
- 否定の信号
- 感情の表出

の聞いているという信号は、話し手からみれば、現在の発話を継続してもよいという許可をもらったということである。この信号を受けることにより、話し手は安心して発話の継続ができる。との違いは微妙である。理解はしていなくても継続してもよいという信号を与えるか、理解して聞いているから継続してもよいという信号を発するかは、聞き手の知識、話し手と聞き手との間の情報共有量による。、は理解していることが前提となって初めて発せられる信号である。は聞いて理解したことに対する同意、は否定、はその内容に対する聞き手の驚き、喜び、悲しみ、怒りなどの感情を表現したものである。

堀口（1997）が指摘しているように、あいづちの機能は、基本的には話し手と聞き手との間における情報共有の確認である。日本語の会話が共話的であるとすれば、聞き手は共有したことを積極的に発信することにより、会話に参画し会話展開に貢献できる。また、話し手は共有の合図を受けることにより、発話の維持、あるいはその反応により会話展開の方向転換が可能になる。このような基本的な機能を踏まえたうえで、本稿では、堀口（1997）のいう、聞き手の予測能力によって発せられる先取りあいづち、先取り発話も含めて、「あいづち的表現」とし、分析の対象

とする。なぜなら、先取りあいづち、先取り発話は聞き手が話し手の発話権行使中に発し、かつ、会話の展開に貢献するという点で、あいづちの機能を有しているからである。以後、本稿ではあいづちとあいづち的表現を特に区別せず使用する。

(2) あいづち的表現

- ア．あいづち詞
- イ．繰り返し
- ウ．言い換え
- エ．先取りあいづち
- オ．先取り発話

あいづちの定型表現として使用される「うん」「はい」「ええ」「そうですか」等を一括してあいづち詞と呼ぶ。(3)は、相手の発話をそのまま繰り返した例、(4)は相手の発話と同一の内容を異なった言語表現で発した、言い換えの例である。

(3) 繰り返し

- G 2 : このね、こぶしがまわらないんですよ。
- F : まわらないですね。(資料B)

(4) 言い換え

- G 2 : すごい、20代のときの、
- M : 若い(資料B)

先取りあいづち、先取り発話は聞き手が話し手の発話の途中でその後半部分を予測し、その予測に基づいて発したものである。

(5) 先取りあいづち

- A : あのを、今日はこれで、
- B : あ、そうですか。お気をつけて。

このBのあいづちは、Aの発話の後続部分、「失礼します」を予測して打ったものである。

(6) 先取り発話

- F : それまで、演劇に興味は
- G 2 : あまりなかったんですよ。(資料B)

ここでG 2はFの発話の後半部分を自分で発話することによって、一文を完成させている。

2. ターンとあいづち

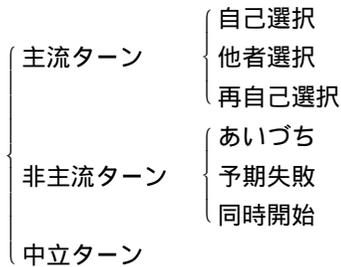
あいづちを独立したターンとみなすかどうかは極めて難しい問題である。Stenström (1994) は、話し手の交替が起こらないという理由で、独立したターンとは認めていない。しかし、水谷 (1993) が指摘するように、日本語が欧米とは違った、共話型の会話展開をするのであれば、あいづちは話し手が会話を展開する上で、聞き手に要求する極めて重要な要素であるということになる。そこで、本稿では、韓日のターンテイキングの相違を明らかにするために構築した金 (2000) のターンとターンテイキングの定義、及び分類を援用する。

2.1. 金 (2000) によるターンの定義と分類

金 (2000 : 81) は、Sacks et al. (1974) を代表とする、「turn を一人の話し手が話し始めてから

他者が話す権利を受け継ぐまでの全ての発話であると」する物理的概念を基本とし、会話が主要部と非主要部とから構成されることに着目して、(7)のようにターンを分類した。

(7)金(2000)によるターンの分類



主流ターンは、会話の主要部を構成するターンで、このターンのみがターンテイキングに関与する。自己選択とは、他者から発話権を譲られたわけではなく、会話参加者のだれかが自らターンを取得するものである。発話の順番が特定されていない場合、会話参加者のすべてが第一のターンを取得する権利をもつ。現在の話し手によって次の発話者が指定され、それによりターンを取得したものが他者選択である。再自己選択は、現在の話し手がポーズの後、あるいは話題の転換を図って引き続きターンを維持した場合のターンテイキングである。

非主流ターンは、会話の主要部を構成しないターンであり、そのためターンテイキングには関与しない。あいづちはこの非主流ターンの下位分類の一つである。あいづちが話し手の発話権行使中に聞き手から発せられる信号であるとするれば、当然、主流ターンにはなりえない。しかし、日本語のような共話的な会話展開を行う言語では、話し手と聞き手との間で情報の共有を確認することは主流ターンの維持に何らかの影響を与えられられる。

予期失敗と同時開始はいずれも発話の重なりが見られる。予期失敗は、ターンを取得しようとして現在の話し手の発話に重なった場合、同時開始は複数の会話参加者がターンを取得しようとして同時に発話した場合である。いずれも発話者のだれかが重なりに気づいた時点で発話を中止する。その中止されたターンは非主流ターンとなる。

中立ターンは、主流、非主流いずれにも分類できないターンである。例えば、非主流ターンでもなく会話の主要部からも外れたターンや、聞き取り不能なターンはここに分類される。

3. 調査

3.1. データ

以下のテレビ番組を録画し、その音声を文字化したものが談話基礎資料である。

(8)談話資料

スタジオパークからこんにちは (NHK, 2004年8月3日放映)

A: 斎藤こず恵 (12分39秒)²⁾

B: 松金よね子 (13分11秒)

C: 草笛光子 (10分33秒)

この番組は女性アナウンサー、男性アナウンサーがペアで司会者になり、ゲストから話を聞くというものである。多くの場合、女性司会者が主導権を取って番組の進行を図る。この資料は2004

年5月から6月に放映されたゲストのなかから女優三人の放送内容を編集して放映されたものである。

3.2. 文字化の原則

基本的に宇佐美(1997)に従う。しかし、今回の調査項目があいづちであり、かつ、前述したようにあいづちは無秩序に打たれているわけではないことを考慮し、適切なタイミングで打たれたあいづちは、他の発話者と重なりが見られても独立したターンとして文字化し、重なりがあることを記号で示す。そして、聞き手のあいづち後に続く話し手の発話はすべて再自己選択ターンとする。なぜなら、話し手は聞き手のあいづちによって発話継続の許可を得たと解釈し、発話を続けると考えられるからである。

あいづちの適切なタイミングとは、堀口(1997:72)に従い、次のように規定する。

(9)あいづちの適切なタイミング

音声的な弱まり、下降イントネーション、尻上がりイントネーション、上昇イントネーション、ポーズ、間投詞、うなずきなどが話し手側にあった時

上記(9)の条件を満たさない、話し手の発話中に発せられたあいづちは、独立したターンとはせず、「同時あいづち」とし、話し手のターン中の発生箇所に挿入する。

3.3. 方法

インタビュー番組であるため、floor⁽⁹⁾を取るのは司会者である。ゲストはその指示に従い、主流ターンをとり、発話を開始する。どこまで発話を継続するか、あるいはどこで終了するかはゲストに委ねられる。番組の進行上、二人の司会者が視聴者に対し情報提供する場面があり、そこで司会者間で打たれるあいづちはゲストに対して打たれるあいづちとは性質を異にするので、中立ターンの下位項目とする。また、あいづちを打った聞き手がポーズを介入させずに発話を続けたものは、ひとまとまりのターンとする。このターンは、聞き手の役割と話し手の役割を兼務することによって生まれ、主流ターンと非主流ターンの中間的存在であるので、「中間ターン」として区別する。本稿におけるターン分類は次のようになる。文字化された談話資料の各ターンを⁽¹⁰⁾に従い、分類する。

(10)本稿におけるターン分類

主流ターン	{	自己選択
		他者選択
		再自己選択
中間ターン		
非主流ターン	{	あいづち
		予期失敗
		同時開始
中立ターン	{	司会者間あいづち
		その他

4. 結 果

4.1. ターン数

表1は、3種類の談話資料に現われたそれぞれのターン数を示したものである。非主流ターンの予期失敗は見られなかった。

表1 テレビインタビュー番組におけるターン数

		資料A			資料B			資料C		
		F	M	G	F	M	G	F	M	G
主流	自己選択	30	16	20	22	13	17	25	9	7
		19.60%	28.60%	11.90%	15.90%	36.10%	11.50%	23.60%	22.50%	7.90%
	他者選択	0	0	8	0	0	12	0	0	14
		0.00%	0.00%	4.80%	0.00%	0.00%	8.10%	0.00%	0.00%	15.70%
	再自己選択	22	6	91	25	4	76	25	13	28
		14.40%	10.70%	54.20%	18.10%	11.10%	51.40%	23.60%	32.50%	31.50%
中間		6	2	9	6	0	10	7	0	3
		3.90%	3.60%	5.40%	4.30%	0.00%	6.80%	6.60%	0.00%	3.40%
非主流	あいづち	90	25	37	83	17	32	35	7	36
		58.80%	44.60%	22.00%	60.10%	47.20%	21.60%	33.00%	17.50%	40.40%
	同時開始	0	0	0	0	0	0	0	2	0
		0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	5.00%	0.00%
中立	司会者間のあいづち	5	5		2	2		14	9	
		3.30%	8.90%		1.40%	5.60%		13.20%	22.50%	
	不明	0	2	3	0	0	1	0	0	1
		0.00%	3.60%	1.80%	0.00%	0.00%	0.70%	0.00%	0.00%	1.10%
合 計		153	56	168	138	36	148	106	40	89
		40.60%	14.90%	44.60%	42.90%	11.20%	46.00%	45.10%	17.00%	37.90%
総ターン数		377			322			235		

3種類の談話資料に登場するゲストのターン数の差がそのまま総ターン数の差となっている。3談話に共通している特徴は、司会者が他者選択によりターンを選択することはないということ、女性司会者のターン数が男性司会者のターン数を上回っていることである。司会者が番組の進行役を務めることを考えれば、前者は当然の結果であり、また、後者の特徴から女性司会者が番組進行の中心的存在であることがわかる。

資料A, Bには共通点はいくつかある。総ターン数に占めるゲストのターン数の割合が最も高

いこと、ゲストのターン取得において、自己選択と再自己選択のそれぞれのターン数が他者選択のターン数を上回っていること、女性司会者のあいづち数がゲストのあいづち数の約2倍であることなどである。資料A, Bでは、次のような女性司会者とゲスト間のターン交替が見られる。

(11) F : (前略)まず、なぜ、なぜアメリカ、なぜシンガーって、そのところをちょっとかいつまんで(G:あ)ご説明いただけますか。

G 1 : はい。あのう、全然もう、ほんとに芸能界には戻る気がなく、マーケティングと心理学を勉強しに渡米したんですね。

F : はい。

G 1 : で、勉強している間にですね、いろんな方と出会いまして、特に、あの、一番大きな出会いが、心理学部にいたときに、あのう、ま、私よりはるかに下の子で、当時17歳だったキーシャっていう女の子が、

F : はい。

G 1 : クラスメートが、あの、声が大きいねと、演説のクラスのとき、

F : ええ。

G 1 :すごい声ねって。(後略)(資料A)

(12) G 2 : 飲むと、あのう、こんな芝居は、できねえとかね、あんなの、今の芝居は、演劇はとかね、

F : はい。

G 2 : あの、なんか愚痴言っている人がいるんですよ。

F : はい。

G 2 : そういう人はね、あのう、しらふになると、ほんと、静かだね、

F : ええ。

G 2 : 何も言わない。ま、どこの社会でも、いるんですけどね。

F : はあ。(資料B)

それに対し、資料Cでは、総ターン数に占めるゲストのターン数の割合が女性司会者より低く、ターン取得において他者選択の割合が資料A, Bより高くなっている。さらに、女性司会者とゲスト間であいづち数にあまり差が見られない。また、番組中、VTRの紹介が4回、台本の紹介が1回あるため、司会者間で打たれたあいづちの割合が高い。資料Cのゲストは、女性司会者に促されて発話を継続する姿勢が見られる。

(13) F : あ、なかで演じられる、よりも、こうした語りって、どうなんでしょう、楽なものでございますか。

G 3 : ええ、なんと言いましょうか、終わった今、考えますと、スタッフと出演者の間に立っているような気持ちでしたね。

F : はい、それは、

G 3 : ええ、あのう、物語をすべてこのへんから、こう見て、つかんでいるような目と、それから、この場合は文四郎という主人公の気持ちも、言わなきゃいけません。

F : はい。(資料C)

資料A, Bでは、主流ターンの取得数から明らかなようにゲストが積極的にターンを取得、維持していて、女性司会者のあいづちがその発話維持を支えている。一方、資料Cでは、ゲストがあまり積極的にターンを維持しようとしないうえに、司会者のあいづち数が減る。と同時に、番組

進行役の司会者が floor を取って新しい質問を発する機会が多くなり、その結果、ゲストの他者選択によるターン数が増える。

4.2. あいづちの種類

次に、中間ターンと非主流ターンにおいて、各発話者が発したあいづち的表現の種類を見る。

表2 各発話者の使用したあいづち的表現数

	資料A			資料B			資料C		
	F	M	G	F	M	G	F	M	G
あいづち詞	90	23	42	79	12	35	42	6	30
繰り返し	1	3	2	3	3	6	0	0	2
言い換え	4	1	2	5	1	0	0	1	2
先取りあいづち	0	0	0	0	0	0	0	0	2
先取り発話	1	0	0	2	1	1	0	0	3
合計	96	27	46	89	17	42	42	7	39

ゲストには、多様なあいづち的表現の使用が見られるが、司会者のあいづち的表現の使用は資料によって違いが見られる。資料Cでは司会者から発せられたあいづち的表現のほとんどがあいづち詞であるが、資料A、Bでは繰り返しや言い換えなども使用されている。

4.2.1. ゲストの場合

繰り返し、言い換え、先取りあいづち、先取り発話の例を順に示す。

(14) M : 大ファンなんですね。

G 2 : 大ファンなんです。(資料B)

ここでは、Mの発話そのまま繰り返されている。

(15) F : やっぱりこれを見つけたって感じだったんでしょうね。

G 1 : 初めて自分で、したことですね。(資料A)

G 1は、Fの発話内容を自分の表現に言い換えている。

(16) F : ま、そのう、これは、核兵器をどうしようかっていう話なんですけれども、に対しての、あのう、目線というはあるけれども、そういうことよりも、むしろ、ご夫婦の関係が

G 3 : そうですね。

F : あらわになって(G 3 : はい)くるという、物語ですね。(資料C)

G 3はFの発話の後続部を予測してあいづちを打ち、FはG 3のあいづちの後、発話内容を続けている。

(17) F : 舞台って、始まってしまったら、

G 3 : もう、ノンストップですからね [笑い](資料C)

(17)では、FとG 3が協力して一文を完成させている。

言い換えや先取り発話は、あいづちターンとして分類されているので非主流ターンであるが、内容に踏み込むという点で主流ターンにも関わっていることがわかる。

4.2.2. 司会者の場合

(18) M : 女性<三人で> { < }

G 2 : <劇団> { > } っていうか、ま、ユニット

M : ユ<ニット> { < }

F : <ユニット> { > } (資料B)

ここでは、男性司会者、女性司会者がゲストの発言「ユニット」を繰り返している。

(19) G 1 : あのう、だらっとし<ないで> { < }

F : <きりっと> { > }

G 1 : きりっと、

F : あああ。(資料A)

(19)は、「だらっとしない」というゲストの発話を、女性司会者が「きりっと」という表現に言い換え、それをゲストが再び繰り返している例である。

(20) G 2 : 30代から (F : はい) 始まって、もう50代になって、それで、その世代の女性の話を、

F : ええ。

G 2 : あのう、

F : 結構、

G 2 : 毎回、

F : 等身大で

G 2 : 等身大でやってるんです。(資料B)

女性司会者の「等身大で」という先取り発話を、ゲストが再び繰り返している。

司会者はゲストの話の内容に関する予備知識があるため、言い換えや先取り発話をしやすい。また、場合によっては、そのようなあいづち的表現を使用することによって番組の進行を円滑に図ることができる。

4.3. 中間ターン

中間ターンは、a) あいづち+情報提供、b) あいづち+間接的働きかけ、c) あいづち+直接的働きかけの3種類に分類される。a) は情報を提供するのみで、相手への働きかけのないものである。b), c) は相手への働きかけのあるもので、直接的働きかけは質問を發し、發話権を相手に譲渡しようとするものである。間接的働きかけは、終助詞「よね」などを伴い、發話権は譲渡しないが、何らかの反応を期待するものである。表3は、各發話者の中間ターン数である(表中のXはあいづちを表わす)。

表3 各発話者の中間ターン数

	資料A			資料B			資料C		
	F	M	G	F	M	G	F	M	G
X + 情報提供	2	2	7	3	0	9	3	0	3
X + 間接的働きかけ	3	0	2	1	0	1	2	0	0
X + 直接的働きかけ	1	0	0	2	0	0	2	0	0
合計	6	2	9	6	0	10	7	0	3
中間 + あいづちターン総数に占める中間ターンの割合	6.30%	7.40%	19.60%	6.70%	0.00%	23.80%	16.70%	0.00%	7.70%

ゲストの中間ターン数と司会者の中間ターン数は反比例している。資料Cではゲストの中間ターンが少なく、司会者の中間ターンが多くなっている。資料A、Bではその逆である。情報提供、間接的働きかけ、直接的働きかけの例を順に示す。

(21) M : ずっと、夫婦だったのに、そういうきっかけがないと、本気で向き合ってなかった (G 3 : ええ) というということですね。

G 3 : ええ。こっち向いてたってことですよ、両方。(資料C)

(22) G 1 : デパートに買い物に行っても、エレベーターを使わず、エスカレーター使わず、
F : ええ。

G 1 : 階段で動いて。

F : そうですか。帰り、デパ地下に寄って、食べ物買っちゃまずいですよね。(資料A)

(23) G 2 : ま、初めての年を、元気に生きたいなど。

F : えええ。岡本さんと田岡さんと、は、どんな感じなんですか、ふつうは。(資料B)

4.4. 同時あいづち

表4は同時あいづちの出現数である。

表4 同時あいづち数

	資料A			資料B			資料C		
	F	M	G	F	M	G	F	M	G
同時あいづち	4	3	4	3	1	0	0	2	5

中間ターンと同様、資料Cではゲストの同時あいづちのほうが多く、資料Bでは司会者の同時あいづちのほうが多い。

5. 考察

同一の司会者による3種類のインタビュー番組の談話を調査した。その結果、3種類の資料における司会者の用いたあいづち的表現には違いが見られた。これを Brown and Levinson (1987) の

ポライトネスの観点から考える。

「フェイス」(face)という概念を用いてポライトネス理論を展開した Brown and Levinson(1987)は、人間には「ネガティブ・フェイス」(negative face)と「ポジティブ・フェイス」(positive face)という二つの社会的な自己イメージがあるという。前者は他人の行動に邪魔されたくないという願望、後者は人からよく思われたいという願望のことである。この「フェイス」を傷つける恐れのある行動を「フェイス威嚇行動」(Face-Threatening Acts, 以下、FTA と略記)と呼ぶ。彼らは、円満な人間関係を維持し、円滑なコミュニケーションを行うためには、FTA を回避するか、あるいは回避できない場合には、フェイスに配慮したポライトネス・ストラテジーが使用されると述べている。ポライトネス・ストラテジーにはネガティブ・フェイスに配慮したネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとポジティブ・フェイスに配慮したポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとがある。ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーは話し手と聞き手との間に何らかの共通点を見つけて、親しさを強調する言語行動であり、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーは、話し手と聞き手との関わりをできるだけ回避するような言語行動で、決まりきった婉曲表現や垣根表現 (hedge) を使用することが多い。

聞き手と話し手との間における知識の共有を表示するあいづちは、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの一つである。相手の話を聞いていることを積極的に伝えることは相手に対する関心の現われであり、相手の発話内容が理解できたことを示すことは話し手と聞き手との間に「共通の場」(‘common ground’(Brown and Levinson 1987: 102))が存在することを確認することにほかならないからである。

あいづち的表現をポライトネスの観点から捉えると、5種類のあいづち的表現のなかで、あいづち詞はただ単に相手の話を聞いているということを示すに過ぎず、積極的にポジティブ・ポライトネスに働きかけているとは言えない。繰り返しや言い換えは、聞き手が話し手の発話内容を理解していることをより積極的に話し手に伝えることになる。先取りあいづちや先取り発話は聞き手の予測能力に基づき発せられるものであるから、話し手の発話内容を理解しているだけではなく、発話内容に興味をもって聞いているという態度を相手に知らせることになる。話し手と聞き手とが協力して「共通の場」を作ろうとしているわけである。

日本語の共話的談話展開は、先取り発話に典型的に現われる。例えば、(24)では女性司会者とゲストが協力して一文を完成させている。

(24) = (6) F : それまで、演劇に興味は

G 2 : あまりなかったんですね。(資料 B)

ゲストは、女性司会者の発話の前半部分を聞いてその発話意図を理解し、自ら後半部分を発話することによって発話全体を完結させている。これは聞き手の予測に間違いがなければ、話し手は自分の発話意図が正しく理解されていると感じ、「共通の場」を築くことに成功する。しかし、聞き手の予測が間違っている場合には、FTA になる可能性がある。これは、言い換えの場合も同様である。(25)、(26)では、女性司会者の言い換え、先取り発話をゲストが繰り返しているので、情報の共有化に成功している。

(25) = (19) G 1 : あのう、だらっとし<ないで> { < } }

F : <きりっと> { > }

G 1 : きりっと、

F : あああ。(資料 A)

- (26) = (20) G 2 : 30代から (F : はい) 始まって , もう50代になって , それで , その世代の女性の話を ,
 F : ええ。
 G 2 : あのう ,
 F : 結構 ,
 G 2 : 毎回 ,
 F : 等身大で
 G 2 : 等身大でやってるんです。(資料B)

話し手と聞き手とが協力して発話を完結させるという , この共話的談話展開は , 話し手から見れば , FTA を回避する一つのストラテジーになる。(24)のFの後続部分にはいくつかの可能性がある。

- (27) a . どうなんでしょうか。
 b . おありだったんでしょうか。
 c . あまりなかったそうですね。
 d . あまりありませんでしたか。
 e . あまりなかったんですか。

(27d)(27e)のような真偽疑問文は , ゲスト自身のことを直接尋ねることになり , 場合によってはFTAになる。(27a)にしてもすわりの悪さが残る。後続部分を相手の予測能力に委ねることによって , 上手くFTAを回避しているのである。

さて , 本稿で調査した3種類の談話資料において , いずれのゲストも様々なあいづち的表現を使用した , 司会者のあいづち的表現の多様性は資料によって違いが見られる。この違いはどこから生まれるのであろうか。番組における司会者の役割は一定であり , いずれの資料においても司会者 (主に女性) が floor をとる。違いはゲストと司会者間の年齢差である。表5はゲストと司会者間の年齢差を表わしたものである。表中の+は , 司会者よりゲストのほうが一世代上であることを , =は同年代であることを , -は一世代下であることを表わしている。

表5 ゲストと司会者間の年齢差

	資料A	資料B	資料C
Fとの年齢差	-	+	+++
Mとの年齢差	=	++	++++

表1 , 表2 , 表5から , ゲストの年齢が司会者より高くなればなるほど , 司会者のあいづち的表現の使用が少なくなることがわかる。さらに , 使用されるあいづち的表現の種類も少なくなる。つまり , 司会者は自分より年齢の高いゲストに対し , 親しさを表わすポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが使いにくくなる傾向があることを示唆している。ただし , 資料Cでは , ゲストの主流ターンの取得率が低いこと , 司会者の中間ターン使用率が高いこと , 番組進行上の関係で司会者間のあいづち使用が多いことを考慮すると , ゲストの話し方が司会者のあいづち的表現の使用に影響を与えていることは否定できない。しかし , 資料Cにおける司会者の質問のし方が , 次に示すようになり遠慮がちなるものであることは , 年齢差をかなり意識したものであると言える。なぜなら , 司会者が質問することは番組進行上 , 当然のことであるが , それでもなお , 質問する

ことは場合によってはFTAになる可能性があることを、司会者が意識していることの現われだと考えられるからである。

(28) F : あ、なかで演じられる、よりも、こうした語りって、どうなんでしょう、楽なものでございますか。(資料C)

(29) F : はああ、実際に内野<聖陽さん>{<}には、

G3 : <ええ、ええ>{>}

F : あの、会われました?(資料C)

(28)では「楽なものですか」という真偽疑問文の前に「どうなんでしょう」という表現が挿入されているし、(29)では、「あの」という言い淀み表現が使用されている。質問時における、このような表現の使用は資料A、Bでは見られない。

資料A、B間にはあまり大きな差が見られない。ゲストの年齢が司会者より下であったとしても、番組のなかではゲストに対する司会者としての役割を演じるからである。そうだとすれば、資料B、C間における違いはその年齢差の大きさの違いから生まれるのではないかと考えられる。興味深いのは、資料Cにおいてゲストが用いたあいづち的表現の多様性である。あいづち詞以外の表現をすべて用いている。ゲストから司会者に対してはポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが使用でき、その逆はできないという非対称性は、会話参加者が年齢による上下関係を意識していることの現われではないだろうか。特に、資料Cでは、ゲストによる先取り発話の使用が3回ある。司会者側が発話を完結しないことによって、FTAを回避したのである。

総ターン数に占める各会話参加者のターン数を見ると、資料Bでは女性司会者とゲストとが番組を展開していったのがわかる。男性司会者とゲストとが同年代の資料Aでは、男性司会者の占めるターン数の割合が資料Bより多くなっていて、男性司会者の談話への関わり方の違いが見られる。

おわりに

本稿では、同一人物の、年齢の異なる相手に対するあいづち的表現の使用を調査した。相手との年齢差によってあいづち的表現の使用頻度、種類に違いがあることがわかった。今回の資料は編集されているため、一人のゲストの発話時間も短く、編集による不自然さがあることは否定できない。より多くの自然談話資料を収集し、確認する必要がある。また、あいづち的表現の使用の違いが年齢によるものなのか、ゲストの発話のスピード、間の取り方等によるものなのか、さらに検討しなければならない。今後の課題としたい。

注

- (1) Fは資料に登場する女性司会者を、Mは男性司会者を表わす。G1、G2、G3はそれぞれ、資料A、B、Cのゲストを表わす。
- (2) ()内の数字は、会話参加者のだれかが発話している時間の合計である。VTR等の紹介時間は含まれていない。
- (3) Spolsky (1998: 122)はfloorを“The right to talk at any given moment in a conversation.”と定義している。

参 考 文 献

- 宇佐美まゆみ (1997)「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) の開発について」『日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』文部省科学研究費一般研究 (C) 研究成果報告書 (URL:<http://japanese.human.metro-u.ac.jp/kokubun/mic-J/nihongo/mic-j-kaiwa.html>) (2003年8月20日アクセス)
- 金 志宣 (2000)「turn 及び turn-taking のカテゴリー化の試み 韓・日の対照会話分析」『日本語教育』105号, 81-90頁
- 久保田真弓 (2001)『「あいづち」は人を活かす』廣済堂出版
- 杉戸清樹 (1989)「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち」『日本語教育』67号, 48-59頁
- 陳 姿菁 (2002)「日本語におけるあいづち研究の概観及びその展望」『第二言語習得・教育の研究最前線 あすの日本語教育への道しるべ』2002年5月増刊特集号, 日本語文化学会 増刊特集号編集委員会, 222-235頁
- 堀口純子 (1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 水谷信子 (1983)「あいづちと応答」『講座 日本語の表現3 話しことばの表現』筑摩書房, 37-44頁
- 水谷信子 (1988)「あいづち論」『日本語学』第7巻13号, 4-11頁
- 村田晶子 (2000)「学習者のあいづちの機能分析 「聞いている」という信号, 感情・態度の表示, そして turn-taking に至るまで」『世界の日本語教育』第10号, 241-260頁
- メイナード, 泉子・K (1993)『会話分析』くろしお出版
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987/1978) *Politeness: Some Universals in Language Usage* (reissued) Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H., E. Schegloff and G. Jefferson (1974) "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking in Conversation." *Language* Vol. 50 No. 4: 696-735.
- Spolsky, Bernard (1998) *Sociolinguistics* Oxford: Oxford University Press.
- Stenström, Anna-Brita (1994) *An Introduction to Spoken Interaction* New York: Longman
- <http://dir.yahoo.co.jp/talent/11/w/98-0264.html> (2004年9月7日アクセス)
- <http://dir.yahoo.co.jp/talent/31/w/93-2697.html> (2004年9月7日アクセス)
- <http://www.yomiuri.co.jp/komachi/sueki/su412201.htm> (2004年9月7日アクセス)
- <http://www.nhk.or.jp/a-room/ana500/ana00367.html> (2004年9月7日アクセス)
- <http://www.nhk.or.jp/a-room/ana500/ana00033.html> (2004年9月7日アクセス)

談話資料について

会話参加者

[司会者]

黒田あゆみ : NHK アナウンサー (1960年生まれ)

吾妻 謙 : NHK アナウンサー (1969年生まれ)

[ゲストと話題]

資料 A : 斉藤こず恵 (1967年生まれ) 2004年5月27日放映の編集版

「鳩子の海」の撮影現場での思い出	4分29秒
一念発起! ダイエット成功	5分13秒
渡米そして歌との出会い	2分57秒

資料 B : 松金よね子 (1949年生まれ) 2004年5月26日放映の編集版

女優になるきっかけ	2分26秒
劇団る・ばる	1分17秒
あこがれの人	

1. ニック・ジャガー	2分54秒
2. 広沢虎三	2分42秒
松金さんチョット苦手なこんな人!?	3分52秒
資料C: 草笛光子(1933年生まれ)	2004年6月10日放映の編集版
ラジオ番組の思い出	2分15秒
草笛さん新しい挑戦!	
1. 「語り」に苦労	2分57秒
2. アニメ声優に初挑戦!	1分10秒
3. 二人芝居と格闘	4分11秒

文字化の記号について

- ? 疑問文であることを表わす。
- <> {<} <>は同時発話された部分,{<}は重ねられた側であることを表わす。
- <> {>} {>}は重ねた側であることを表わす。
- () 同時あいづちであることを表わす。
- [] 説明であることを表わす。